

新井中央小だより

ホームページ <http://azalea.ac.city.myoko.niigata.jp/araich-s/otayori/index.html>メールアドレス chuou@ac.city.myoko.niigata.jp

No. 290

2024 (令和6) 年1月26日

日常の幸せを あいさつから

遅ればせながら、新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひいたします。この度の能登半島地震で、被災されたご親族やお知り合いがおられる方々もおいでのことと存じます。心よりお見舞い申し上げます。

また、当日は、PTA メールや安否確認の電話等でお騒がせいたしました。今回の教訓を基に、本日より後半に、新たな連絡ツール「tetoru (テトル)」の導入についてお知らせとお願ひを掲載いたしましたので、ご理解とご協力を宜しくお願ひいたします。

この1年だけでも新型ウイルス禍、海外の戦争、能登半島地震をはじめ、ニュースや実体験等を通じて、私たちは、大切なものを失ったり、それまで当たり前だった生活がままならなくなり、不都合や我慢・寂しさ等に直面したりする時に、何気ない日常のありがたさに改めて気付き思い至る、ということを繰り返しているように思います。家族や親しい人との日々のかかわりや会話が、その何気ない日常を象徴しているように感じるのは、私だけではないと思います。

今、中央小では、学校評価や日々の子どもたちの姿を基に、改めて「あいさつ」運動に取り組んでいます。世の中で「あいさつの意義・効果」は語りつくされた感もありますが、私は8年ほど前に見つけた奈良学園小学校の藤原和幸校長（当時）のあいさつの意味、についてのお話が最もしっくりきているので紹介します。（実は、「新井中央小だより No.193」の再掲です。）

藤原氏は落語の故桂枝雀師匠の噺「くやみ」のマクラ（噺の導入）を引用しながら、「あいさつは、人間に野性がまだまだたくさん残っていた頃の周囲への恐怖心や警戒心を解きほぐしてくれる言葉であり、『私はあなたの敵ではありませんよ。』『あなたのものを取りませんよ。』という意味が込められている。だから、初めて会った人や、その日に初めて顔を合わせた人に“あいさつ”をすると、相手の人は安心することができる。さらに、この“あいさつ”をニコニコの笑顔でできたならば、『敵ではありませんよ。』という意味だけでなく、『あなたの味方ですよ。』『大好きですよ。』という意味さえ加わるのではないか。そうすると、安心感だけでなく、相手に『認められた』という幸せな気持ちさえ感じてもらえるかも知れない。」という趣旨の考えを述べられています。あいさつには敵ではないことの表明から発展して相手の存在を認めるという働きがある、ということです。だから、あいさつをされない、あいさつをしても返ってこない、という時に、存在を否定されたような不安で悲しい気持ちになる、とまで言うのは、ややオーバーでしょうか。

あいさつ運動では、あいさつのポイント「①あいてをみて ②はっきりと ③あいさつされたら かえす」を掲げ、なかよし班や学年学級での話し合いを経て、児童会のプロジェクト委員会が中心になって取り組んでくれました。校門で元気な朝のあいさつをしてくれる子も増えました。

個人的にはあいさつで一番大切なのは「相手意識がある」ことで、それがたとえ小さな声や小さなお辞儀等であっても、相手にはその子らしさとして伝わるはずだと私は感じていますが、将来的には明るくはっきりと、心のこもったあいさつができるに越したことはないでしょう。

こうしてあいさつから始まる人とのかかわりこそが、何気ない日常の幸せに他ならないと、改めて今回の地震から感じた次第です。是非、ご家庭でも、そして地域でも、中央小の子たちにあいさつからはじまる温かいかわりをいただけますようお願いいたします。（校長 村治隆夫）